

夏の学校「生活世界における科学教育」ご案内 p.02

代表挨拶 夏目賢一 p.04

事務局から

総会の報告 p.05

事務局会議の報告 p.06

予算運営に向けて p.07

NPO法人WINの会の講演報告 内山弘美 p.08

STS情報 p.09

STSNJ Yearbook論文投稿規定 p.16

NEWS LETTER

2001 VOL.12 No. **1**

STS NETWORK JAPAN

STSは、Science, Technology, and Society の略称です

STS Network Japan '2001 夏の学校
生活世界における科学教育

日程：2001年7月28日（土）～30日（月）

会場：小豆島「内海町サイクリングターミナル」

<http://www.kanto.or.jp/CyclingTerminal/Terminal/uchinomicho.htm>

〒761-4425 香川県小豆郡内海町坂手甲1834

tel&fax:0879-82-1099

アクセス：（関西以北）

姫路港から両備運輸フェリーで福田港、バスで45分、坂手東下車、徒歩3分

※大阪港・神戸港からは便数は少ないですが、坂手港直通的フェリー（関西汽船）があります。
（中国以南）

岡山港からフェリー（関西急行フェリー）あるいは高速艇（小豆島高速）で

土庄港、バスで50分、坂手東下車、徒歩3分

〔交通に関しては、後日案内とともに詳細を郵送します。〕

予算：2泊参加の方 14,000円（3食付き）

1泊参加の方 7,000円（3食付き）

今日、初等・中等教育における「ゆとり教育」が叫ばれる一方で、学力低下への懸念が表明されています。特に科学教育へ目を向けてみると、「いかに今の学生は科学的知識が欠けているのか」がおもに議論されており、「科学理解イコール科学受容」という啓蒙主義的視点から抜け出せておりません。すなわち、専門家が要求する知識と、専門家を指さない人々が必要とする知識との間には、ズレが存在するはずです。

しかし、教育問題の俎上で「専門家を指さない人々にとってどのような科学知識が必要なのか」は、十分に議論されておりません。

そこで今回の夏の学校では、テーマを「生活世界における科学教育」と設定することで、現在どのような科学技術教育が、特に専門家を志望しない人々にとって必要なのかを、多角的に議論できればと考えております。

すなわち、現代の教育問題に関心がある方はもちろん、様々な問題意識を持った方が参加されることで議論がより実り多いものになると思います。そのためにも、多様な分野の方々のご参加をお待ちしております。

今回は趣向をかえて、小豆島において開催することになりました。また、近くには豊島がありますので、夏の学校のオプションツアーとして、豊島ツアーも企画しております。

◆申込スケジュールなどは、下記の通りとなっております。皆様ふるってご参加ください。

1) 発表者（とテーマ）受付 締め切り 6月15日（金）

（とりあえず資料だけほしいという方は、この日までに申込書の

「プログラムを送ってください」に丸をつけて送付してください。）

2) 参加最終締め切り 7月2日（月）（発表のない方はこの日までであれば参加可能です。）

3) 問い合わせ先 STSNJ夏の学校実行委員長 三村太郎（PHS:070-6113-4634 / E-mail:office@stsnj.org）

申し込み先（原則としてEメールないしFAXをお願いします）

STS Network Japan 事務局

〒153-8902 東京都目黒区駒場3-8-1 東京大学大学院総合文化研究科

藤垣研究室気付

Fax: 03-5454-6990

E-mail: office@stsnj.org

● オプショナル 豊島ツアー

日程：7月30日（月）

小豆島からフェリーで約1時間というロケーションを利用して、何かと話題になっている豊島の産廃場を見学し、豊島について詳しい山中由紀さんをコーディネーターとして、現地で活動しているアクターに直接話を聞いてみようという企画を行います。

豊島観光という産廃業者の信じがたいような不法投棄を、取り締まる側のはずである香川県が助長し、その結果1978年から1990年の兵庫県警による摘発までに、約50万トンの産廃が豊島に埋められました。住民は県や業者を相手取り公害調停にもちこみ、ようやく昨年6月6日に、香川県による産廃の完全撤去という内容を もりこんだ最終合意に達しました。無害化处理施設が建設される直島に関する問題なども射程に入れてツアー内容を計画中です。奮ってご参加ください。

* 帰りは豊島家浦港16時40分発のフェリーで宇野へ向かう予定です。

岡山駅行き宇野線との接続により、早くて18時30分頃遅くとも19時頃岡山駅に到着になります。場合によっては、宇野よりバスにて岡山に向かうという選択 肢もあります（所用時間はほぼ同じ）。

* 夏の学校会場坂手から、宇野までのフェリーまたは海上タクシーの運賃2500円程度が必要になります。

----- 参加申し込み用紙 -----

STS NetworkJapan 夏の学校・豊島ツアー 参加申し込み用紙

STS NetworkJapan 夏の学校2001に（参加します。 / プログラムを送ってください。）*

豊島ツアーに（参加します。 / プログラムを送ってください。）*

氏名（フリガナ）

性別（男・女）*

連絡先（所属先・自宅・E-mail）*

E-mailアドレス（ ）

所属先: 〒

Tel:

Fax:

自宅住所: 〒

Tel:

Fax:

発表（する・しない）*

発表される方のみ 講演題目（ ）

* いずれかに○印をしてください。

複数必要な方はコピーをしてお使いください。E-mailでの申し込みも同様の書式でお願いします。

代表挨拶

夏目賢一

東京大学大学院博士課程

「STS研究」では、その言葉が示すように、取り扱う問題が科学技術と社会との相関関係において生じる広範囲の問題群に及んでいます。そしてSTSNJでは、この「STS研究」を標榜して、さらにアカデミックな場を超えて、それらの問題群についてさまざまな社会的立場の人々が議論できるような場を作るために活動をおこなってきました。今日、STS研究への社会的な期待が徐々に高まっているように感じます。科学技術に関する個々の社会問題に取り組む団体が多々ある中で、このSTS研究に期待を寄せる背景には、個々の問題群を取り扱うだけでは見えてこない、科学技術に関する問題に共通して内在して解決を困難にしている、ある種の問題点が予感されているからでしょう。個々の問題群を取り扱っているだけでは問題が時間的・地域的に局所化されてしまい、科学技術に関する諸問題に共通して内在する問題点があるとしても、それが発見されにくくなってしまいます。もちろん問題をそれが生じてきた文脈に即して局所的に考えることは、問題の本質を見失わないために重要です。しかしその予感が正しいとすれば、これら局所的に考えられているそれぞれの問題群を、上から抽象的に論じてしまうのではなくて局所的な問題として維持しながらも、時間的・地域的に「継続・接続」した上で考察することが重要になります。そして、ここにSTSNJが「科学・技術・社会」全般を視野に入れて活動を続けることの意味があると考えられます。

以上を念頭におくと、今年度の活動においては、これまで以上に諸問題に対する関心を持続し、そして並行するそれらの問題群に関連性が見出せるならば、その結節点を認識しつつ連続性をもって考えていくことが重要であると考えられます。また局所的問題群を局所的なまま維持しながら考えていくことを可能にするために、社会的立場の違いの中で、とくにそれぞれの当事者において、問題点や科学的知識を「いかにして伝達・共有するか」という問題について考えていくことが重要だと考えられます。シンポジウムや夏の学校などSTSNJの運営にも、この点において工夫をしていけたらと考えています。

この一年間、どのようなことができるかわかりませんが、皆様とともに方向性を見出しつつ、努力していきたいと考えております。皆様とともに活動していけることを光栄に思います。至らない点も多いと思いますが、よろしくお願いいたします。

◆◆事務局から◆◆

●●総会の報告●●

4月1日におこなわれました、総会の議事録を報告いたします。

議事に関するご意見・ご質問は、些細なことでもかまいませんので、事務局<office@stnj.org>までお寄せください。

於) 東大先端研 (2001/04/01)

(1) 2000年度事業

- ・夏の学校
2000年7月29-31日「STSによる21世紀の批判的構想」
於) 河口湖 参加者 49名 報告12件
- ・春のシンポジウム
2001年3月31日「大学独立行政法人化問題とは何か」
於) 東大先端研
参加者 64名 (=受付名簿記入者数)
- ・研究発表会
2001年4月1日 報告7件 於) 東大先端研
- ・公開シンポジウム (下記) の後援
2000年12月28日「GMOと科学論・リスク論：現代の科学・技術・社会(STS)論研究」(主催：神戸GMO研究会他) 於) 神戸大学
- ・Yearbook'00準備 (詳細は2001年度の事業計画参照)
- ・Newsletter発行 4回
(2000/5/15, 11/30, 2001/2/15, 3/15)
- ・事務局会議6回
(2000/4/20, 7/05, 9/7, 12/2, 2001/1/25, 3/31)
- ・事務局移転 (東大藤垣研へ)
- ・Yearbook管理場所の移転
(東工大中島研→東大藤垣研)
- ・ホームページ移転とメーリングリストサービスの移転
<http://stsnj.org> へ
e-groupsによるメーリングリスト運営へ
- ・英語版入会案内パンフレットの作成
(翻訳は服部恭子さんに依頼)

(2) STS Network Japanの状況

(2001/3/31現在)

・会員数 約280名

※2年分会費未納による会員資格停止という規則の解釈や適用の厳密度によっては若干数が前後する可能性あり。

会員定義

・新規会員数 (2000年総会以降～2001年3月31日) 25名

(3) 会計報告

(会計：三村太郎、会計監査：重松真由美)

《STS Network Japan 2000年度会計報告》

【収入】

前年度繰越金	538,066円
会費	380,900円
計	<u>918,966円</u>

【支出】

NewsLetter発送費	144,068円
テープおこし代	80,000円
夏の学校諸経費	22,315円
レンタルサーバ	28,475円
事務局移転	2,394円
通信費	68,054円
春のシンポジウム経費	75,663円
小計	<u>420,969円</u>

次年度繰越金

計 918,966円

《YearBook 2000年度会計報告》

前年度繰越金	347,965円
収入 (YearBook売り上げ)	7,860円
支出 (テープおこし代)	40,000円
収支合計	-32,140円
次年度繰越金	<u>315,825円</u>

会場からの提案：新年度事業計画立案の際に予算立案も行い、それとの比較で収支を報告すべきではないか→今後前向きに検討する

(4) 2001年度人事

代表：夏目賢一
事務局長：水沢光
会計：重松真由美
会計監査：三村太郎

夏の学校実行委員長：三村太郎

副実行委員長：夏目賢一

庶務（名簿管理その他）：小山田和仁

※総会時は未定でしたが、後の話し合いにて小山田さんに決定いたしました。ご了承下さい。

文書掛：平川秀幸

広報

ニューズレター：春日匠（継続審議）

Web：春日匠（～5月）、夏目賢一（5月以降）

掲示板管理：春日匠、中村征樹

イヤーブックレイアウトと特集記事編集：春日匠
（継続審議）

イヤーブック論文審査・編集：

※中島氏より提案あり（下記）→承認

※提案事項（中島秀人氏）

イヤーブックの投稿論文（査読付き）部分編集担当編集委員人事

現在の体制

編集顧問 村上陽一郎

委員長 小林信一

副委員長 中島秀人

委員 小川正賢、柴田清、調麻佐志

新体制

編集顧問 村上陽一郎（国際基督教大学教授、東京大学名誉教授）

委員長 中島秀人（東京工業大学助教授）

委員 小川正賢（広島大学教授）

小林信一（筑波大学助教授、文部科学省科学技術政策研究所総括主任研究官）

柴田清（新日本製鉄先端技術研究所）

調麻佐志（信州大学助教授）

塚原東吾（神戸大学助教授）

藤垣裕子（東京大学助教授）

趣旨

編集委員会のいっそうの充実をめざし編集委員を二名増員する。また、実質機能しなかった委員長、副委員長体制を見直し、当面委員長のみとする。

（5）2001年度の事業計画

- ・夏の学校（実行委員長：三村、副実行委員長：夏目）
- ・シンポジウム：秋と春に計2回
- ・Newsletter：年4回発行
- ・Yearbook：来春に発刊（昨年度のYearbookは6月頃発刊予定）
- ・名簿改訂

会場での意見

・夏の学校のテーマとして「教育問題」「ジェンダー」を検討

・夏の学校の開催地として、STS的問題の現場（香川県・豊島や徳島県・吉野川など）を検討

※2000年度の夏の学校でおこなわれた「夏の予備校」を今年度におこなうかどうかは未定

・シンポジウムのテーマとして「医療問題」「科学ジャーナリズム」を検討

・会合の終了時刻の早期アナウンスの必要性（来場者のスケジュール調整のため）

※研究会の終了時刻については、事実上、開催直前まで発表を受け付けているため、スケジュール調整が難しい。これについては締め切りの設け方や、終了時刻を決めた上でプログラムを組むことなど、これから検討いたします。

●●事務局会議の報告●●

2001年4月19日（木）18時～21時半

於：東大先端研13号館209号室

出席者：夏目、水沢、重松、小山田、三村、隠岐、浅見、綾部、柿原（9名）

1. 夏の学校

日時：7月28日（土）～7月30日（月）

場所：第一候補は小豆島、宿の予約がとれなかった場合は他の場所を再検討（琵琶湖・草津など）

テーマ：科学技術に関する教育の諸問題について

今年度は「夏の予備校」は開催しない。

小豆島で開催する場合、豊島への任意参加のツアーを企画する。

※小豆島という案は、科学技術に関する社会問題が起きている場所の近くで夏の学校を開催したらよいのではないかと、という意見から出てきた案です。ただ、今回の夏の学校のテーマは「教育」と決まったため、「産廃問題」は日程的に大きく取り扱うことができません。そのため、小豆島で開催する意義を問う議論もなされました。しかし結局、夏の学校では「教育」を中心におこない、豊島見学は最終日に任意参加という形で企画することで、開催地を小豆島にする価値はあるという結論に達しました。ただし、夏の学校に適した（安価な）宿舎の予約がとれなかった場合は、参加費を上げるよりは他の場所を再検討するという方針に決まりました。

2. 前年度役員から今年度役員への引継ぎ・業務の確認

代表：事務局会議開催および調整役

事務局長：広報と連携したNL関連業務

会計：通帳、口座の管理

庶務：名簿の情報更新と会費支払い状況チェック・NJ-ML

への新規登録

このところ、MLへの新規登録に関して、登録不備が少なからず発生して、会員の皆様にご迷惑をおかけしました。今後は責任の所在を明確にし（庶務・小山田と隠岐が担当）、このような不備がないように努めます。

3. 会計の予算化

今年度は試験的に予算の作成をおこなう（5月中には発表）

来年度からは総会の承認を得て、予算運営へ移行。

これまでは会計の決算報告はありましたが、予算による会の運営がなされていませんでした。今年度は予算を試験的に作成し、会計運営の明確化を図ります。

4. シンポジウムのテープおこしについて

状況確認：神戸大学（浅井さん）に委託・テープは事務局で保管

5. その他

今後の活動について

これまでに例のないことでも、新しい案を積極的に取り入れたいと考えています。ささいな提案でもかまいませんので、ぜひ事務局までお寄せください。

●●予算運営に向けて●●

今年4月19日の事務局会議で決められたように、明瞭な会計運営を目指して、今年度から会計の予算運営を検討することになりました。そこで、事務局では過去のデータをもとに今年度の予算案を「仮に」作成してみました。

（「仮に」というのは、もう年度が始まっているために、この予算案が「予算」としての実効力はないという意味です）。これを以下に示します。またこの予算案の検討のなかで、予算運営にともなういくつかの問題点が浮上しています。これについても以下に示します。事務局では今後、これらの問題の取り扱いを検討していく予定です。

問題点

1)ここで計上した会員数は名簿上の会員であり、実際に会費を払っている会員の数とは差があると思われます。名簿上の会員数での予算案では、実情と合わないかもしれませんので、過去5年の会費収入平均（480,000円）による試算も（）内に加えました。

2)YearBook会計

現在、YearBook会計の独立性とその取り扱いが不明瞭となっております。（本予算案ではYearBook売上げを収入として計上しております）近日中に実施されますYearBook会計とNJ会計との統合をまって、この会計を明確化したいと考えております。また、昨年度のYearBookの作成が遅れているため、今年度に二年分の印刷費が計上されています。

また、注意点として

1)夏の学校

夏の学校は独立会計で運営されていますが、招待者の宿泊費や講演費などはNJ会計で負担しております。このため、夏の学校の費用がNJ会計に計上されています。

2)レンタルサーバー代金

レンタルサーバーの代金は定額ですが、国外のものを使用しているため、為替の変動が反映されます。そのため、正確な金額は計上できていません。

――以下、「仮」予算案――

〔収入〕

前年度繰越金 498,057円

会費 987,000円（3500円×282人）

（比較として 480,000円 ←過去5年の平均）

*96年 48万円；97年 51万円；98年 242,000円；
99年 755,500円；00年 380,900円

YearBook売上げ 100,000円

*98年 64,000円；99年 141,455円；00年 7,860円

計：1495,057円（比較として 988,057円）

〔支出〕

NewsLetter発送費 150,000円

*98年 139,646円；99年 160,901円；00年 144,068円

YearBook2000印刷費 330,000円

*98年 338,040円；99年 315,000円

YearBook2000発送費 60,000円

*99年 56,763円

YearBook2001印刷費 330,000円

YearBook2001発送費 60,000円

夏の学校謝金・諸経費 20,000円

*99年 20,000円；00年 22,315円

事務局会議開催費 40,000円

シンポジウム経費 70,000円

*98年 京都シンポ 64,997円；

99年 秋シンポ 14,928円 春シンポ 13,820円

7月WSセミナー 35,460円；00年 春シンポ 75,663円

通信費 40,000円

*99年 25,460円；00年 68,054円

テープおこし 80,000円

*00年 80,000円

レンタルサーバー 20,000円

*00年 28,475円

小計：1200,000円

次年度繰越金：285,177円

(比較として -221,943円)

計：1485,057円

(比較として 978,057円)

——以上——

※上の予算案は、あくまで予算運営化に向けて試験的に作成したものです。従って実効力はありませんが、来年からの正式な予算運営の導入へ向けて、現在事務局会議の取り組んでいる問題を知っていただくために掲載しました。不明な点は事務局までお問い合わせください。

NPO法人WINの会の講演会報告

内山弘美（東京大学大学院）

過去10年の間に、日本の大学は、従来型の大学のイメージである「象牙の塔」から、社会に開かれた新しい大学像へと変化の兆しを見せている。大学の社会サービス、産学連携がその一例である。最近では、複数の国立大学でTLOが創設されている。

東京大学では、昨年8月に板生清教授（新領域創成科学研究科）により環境NPO WINの会が創設された。WINの会の構成メンバーは、大学関係者の他、機械、情報、出版等の企業からの参加が目立つ。当会で対象とする「環境」の特徴は、機械とエコロジーの融合、機械と自然の融合、機械と生物の融合、ウェアラブル・コンピューターに象徴される機械と人間の融合である。

本稿では、3月22日に東京駅のルビーホールにおいて開催された第5回講演会の様子を紹介したい。

樋口広芳東大教授の講演は、渡り鳥を保全するという立場から、渡り鳥に発信機をつけて渡りのルートを追跡し、渡りのパターンや経時移動パターンを明らかにするという調査を紹介した。同様に、都会のカラスに発信機をつけて行動パターンを追跡した結果、銀座・赤坂・六本木を行動範囲にしているカラスがいることが明らかになり、これらのカラスをシティ派・グルメ派カラスと名付けた。

林泉文化女子大学教授の講演「ウェアラブル・ファッション」も、斬新なものであった。MITのメディア・ラボと世界で有数のデザイン学校の共同プロジェクトであり、ウェアラブル・コンピューターにファッション性を加えるというものである。講演の後半の部分は、メディア・ラボで行われた華やかなウェアラブル・ファッションショーの様子のビデオ上映であった。

大和裕幸東大教授の講演は、工場現場における作業用のウェアラブル・コンピューター開発の話題であった。実際に造船所の作業現場でウェアラブル・コンピューターの検証をした結果の紹介もなされた。

会の最後に、理事長である板生教授は、機関誌「ネチャー・インターフェース」の第2号の予告、宮城県をフィールドとしたアグリビジネス、国連大学との共同プロジェクトの構想、及び環境プランナー養成のための授業を検討中であることを語った。

会費納入について

このニュースレターが入っていた封筒のラベルに関する説明

お名前の右下に、会費の支払い状況などを示しております。例えば、

「00,01未」と「01未」は、それぞれ該当年の会費（3500円）が支払われていないことを表します。前者に該当の方は、今年度中に会費のお支払いがなければ、それをもって脱会の意志表明と受け取らせていただき、以後Newsletterの発送を中止します。

「00不足」は、お支払いいただいている会費が3500円には不足しているもので、「不足」の後の数字が不足金額を表わします。お手数ですが差額分お支払いください。

「臨時」は、「夏の学校」への参加者など、何らかの理由でSTS Network Japanに関係がある方に、臨時にお送りするものです。この期間は通常1年間ですので、送付が始まって1年以内に入会の手続きをとられなければ、以後Newsletterの送付を停止させていただきます。

◆◆STS情報◆◆

●●開催状況●●

●科学史・技術史の研究会「火曜日ゼミ（火ゼミ）」の例会のお知らせです。

「火曜日ゼミ（火ゼミ）」というのは、東工大の一室を借りて行われている科学史・技術史の研究会で、原則として毎週火曜日の午後に行われています。参加は自由です。運営は東工大とは一応、独立の「火ゼミ運営委員会」が運営しています。

問い合わせ先：

梶 雅範 e-mail masanori@me.titech.ac.jp

電話03-5734-2270 F A X 03-5734-2844

・場所：東京工業大学（東京都目黒区大岡山2-12-1）

石川台4号館地下ゼミ室B02

（東工大正門は東急大井町線および目蒲線大岡山駅下車徒歩1分、ゼミ室までは正門 から左手の直線道路を直進徒歩7分、トンネルをくぐった奥。7階建ての新しい建物の 左隣の4階建ての建物が石川台4号館） 正門左手に学内の建物案内地図がありますのでご確認ください。

・時間：午後1時20分から

・2001年4月～7月のスケジュール

4月17日 馮昭奎(ふう・しょうけい) 中国社会科学研究院・日本研究所)

「20世紀における工業化の歴史ならびに情報化への転換について」

4月24日 隠岐さや香「18世紀後半における公衆衛生、人口、財政問題と科学の遭遇～パリ王立科学アカデミーと『公共の福祉』」

5月8日 三浦伸夫「18-19世紀の数学愛好家たち—大衆数学雑誌の普及」

5月15日 小泉直彦「機械翻訳実験機 KT-1及びその背景」

5月22日 市川 浩「戦後旧ソ連邦における軍需工業の技術的再編：装備省によるロケット開発の背景（仮）」

6月5日 渡辺 弘「戦後削除文書から見た『ドイツ科学』誌」

6月12日 山崎正勝「1950年代初期の日米原子力政策」

6月19日 河村 豊「大陸科学院から科学技術新体制にいたるまで—2つの美濃部洋次文書を利用して—」

6月26日 岡田大士「東京工業大学における大学改革「和田改革」—「学制改革委員会」の議論と一般教養—」

7月3日 塚本浩司「たのしい知の技術」

7月10日 徳元琴代「有機電子説形成の社会的要因について」

7月17日 Walter Grunden (ボーリング・グリーン・オハイオ州立大学) "Science under the Rising Sun: Weapons Development and the Organization of Scientific Research in World War II Japan(仮) "

●科学・技術と社会の会のご案内 126th

日時：2001年4月26日(木) 6:00～8:00 P M

話題提供者：手塚晃氏(金沢工業大学)、中山茂氏(神奈川県)

テーマ：「日本の学術政策—もうひとつの戦後史」

場所：〒113-0033 文京区本郷7-3-1

東京大学社会科学研究所 1F 中会議室

*4月より事務局が下記へ交代しました。入会ご希望の方は、下記までお名前、住所、電子メールアドレス、所属、関心領域をお寄せください。転居なされた場合も、下記へご連絡ください。

科学・技術と社会の会事務局

〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

東京大学大学院人文社会系研究科松本三和夫研究室気付

電子メール: miwao@lu-tokyo.ac.jp

●東工大中島研究室公開セミナー

「先端科学技術と社会」第43回研究会

科学技術の高度化は、それを受容する社会との間に、数々の解決すべき課題を提起しています。セミナー「先端科学技術と社会」では、このような問題にまつわる刺激的な話題の提供者をお招きし、年間10回のペースで研究会を開催しています。

例会の第43回は、中国における日本研究の第一人者で、現在学術振興会の招きで東工大に滞在中の憑先生に、日本の技術システムの変化についてご発表いただきます。大変の興味深いお話がうかがえると存じますので、ふるってご参加ください。なお、今回は東工大火曜日ゼミと合同で開催のため、時間および会場がいつもと異なっておりますのでご注意ください。終了後に恒例の懇親会を開催いたします。

日時：2001年4月17日(火) 15:00-17:30

内容：20世紀における工業化および情報化社会の転換

憑昭奎 Feng Zhao Kui

(中国社会科学院・日本研究所教授、中国全国日本経済学会副会長)

会場：東京工業大学大岡山キャンパス 国際交流会館2F 会議室

世話人：東京工業大学大学院社会理工学研究科

中島秀人・水沢光

東京大学先端科学技術研究センター 大谷卓史

連絡先：〒152-8552 目黒区大岡山2-12-1

東京工業大学大学院社会理工学研究科 中島研究室

tel/fax 03-5734-3255

e-mail nakajima@mail.me.titech.ac.jp

●<駒場STS研究会>

下記の要領で公開研究会を開催します。

これは、東京大学大学院総合文化研究科（駒場）における廣野・堂前・清野ゼミ（岩波「科学」1999年3月号の「河川生態工学」の記事参照）と藤垣研の合同ゼミをベースに、公開の研究会としたものです。

参加自由ですので、関心のあるかたの参加をお待ちしております。

演題：日本で「サイエンス・ショップ」を作るには～欧州国際会議に参加して～

演者：平川秀幸氏（京都女子大現代社会学部講師）

日時：3月14日午後3時から5時 東京大学大学院総合文化研究科（駒場）15号館 4階409会議室

内容：法律に「法律相談所」があるように、科学にも「科学相談所」（サイエンス・ショップ）がある。欧州でのこの試みは、「科学的根拠」をめぐって、県や市や国側と、地域住民が対立するときなど、市民の側に科学的知見のアドバイスを与える場所として位置づけることができる。日本においても、所沢野菜のダイオキシン報道、吉野川第十堰建設事業における建設省と住民側の根拠データの違い、などさまざまな論争が起こっている現状に鑑み、これらの論争に、「科学相談所」は果たす役割は大きいのではないだろうか。

今回は、1月末にベルギーで開催されたサイエンス・ショップの国際会議に参加された平川さんに、この国際会議の内容を報告していただくとともに、この試みの日本における可能性について、この国際会議の動向や日本でのSTS調査（政策科学研究所）の結果等をもとに、議論していただく予定である。

関心のあるかたはふるってご参加ください。

●MELYST(MEguro LYceum of STs)研究会のお知らせ
益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

さて、下記のとおりMELYST研究会を開催致します。

皆様には御多忙中とは存じますが、ふるってご参加下さいますようお願い申し上げます。

日時：2001年4月6日（金）16：30～18：30

場所：久米美術館7F会議室

（品川区上大崎2-25-5 久米ビル、03-3491-1510, JR目黒駅西口徒歩1分）

発表者：深井佑造（日本大学文理学部講師）

テーマ：「日本の原爆開発 ～“マッチ箱一個”の行方を追って～」

事務連絡担当：梶田（久米美術館）

Tel. 03-3491-1510

Fax. 03-3491-6617

E-mail ricca@t3.rim.or.jp

●第16回「湘南科学史懇話会」

日時：2001年4月29日（日）午後1:00～5:00。

場所：神奈川県立「かなが女性センター」第1会議室、藤沢市江ノ島1-11-1

電話046-627-1111（代表） 小田急線片瀬江ノ島駅下車、徒歩15分

講演者：里深文彦氏（武蔵野女子大学・科学技術史）

「21世紀ヨーロッパの技術戦略を考えるーわがスウェーデン・イギリス体験からー」

連絡先（事務局）：猪野修治（242-0023大和市渋谷3-4-1 tel046-269-8210）

●明治学院大学 社会学部付属研究所 特別推進プロジェクト『現代社会における技術と人間』主催公開講演会

講師：村上陽一郎（国際基督教大学 教授）

演題：「技術者の社会的倫理ー科学者と比較して」

日時：2001年4月21日（土曜日）14:00～16:00

会場：明治学院大学白金校舎 2号館 2101番教室

日本経済の再生のために、ITや遺伝子工学に期待がかけられています。反面、科学技術の発達が私たちの生活に与える影響には大きな不安がつきまといまいます。インターネットや携帯電話の普及が人間関係をどう変えるのか、人間の設計図・ヒトゲノムの解読やクローン技術の進歩が何をもたらすのか、など疑問は尽きません。そこで、「現代社会における技術と人間」について教員・学生・市民の方々と一緒に考えるために、「科学・技術と社会」について造詣が深い村上陽一郎先生をお招きしての公開講演を企画しました。柔らかな語り口ながら「技術と社会」に対する斬新な視点を提示していただけたと思います。

*講師・村上陽一郎先生からのメッセージ

「科学者の倫理は基本的には仲間内の行動規範という形をとったのに対して、技術者の倫理は先ず社会に対する責任という形で述べられるものであった。しかし、この区別は、ここ数十年の間に劇的な変化を遂げつつある。この講演では、その変化に注目する。」

*村上陽一郎先生について

東京大学先端科学技術研究センター長を経て、現在、国際基督教大学教養学部教授。東京大学名誉教授。専門は科学史、科学哲学。『科学者とは何か』（新潮選書）、『安全学』（青土社）、『科学の現在を問う』（講談社現代新書）など著書多数。

*参加費無料。参加申込は不要です。是非、ご参加ください。（問合せ先：社会学部付属研究所 03-5421-5204）

●公開シンポジウム「工学倫理の条件」

（文部科学省、教養教育改善充実特別事業経費による）

2001年3月17日（土） 午後1-4時

名古屋工業大学 教養棟102

柳田博明 (名古屋工業大学学長) 「実践する技術哲学者」とその倫理

小林傳司 (南山大学) 工学倫理と社会 科学技術への市民参加という観点から

斉藤了文 (関西大学) 工学の哲学と工学の倫理

坂下浩司 (名古屋工業大学) 工学倫理教育とは何であり何でないか

ほか

司会 瀬口昌久 (名古屋工業大学)

◆『「知」の欺瞞』の著者の一人ジャン・ブリクモンがまもなく来日します。同書の訳者の一人である大野克嗣さん@イリノイ大学が現在慶應義塾大学理工学部で客員で教えるにきておられ、この人が招聘のイニシアティブを取られました。GEFCOはこれに便乗させていただき、次の講演会をおこないます。

GEFCO特別セミナー(第2回)

講演者：ジャン・ブリクモン (理論物理学者@ルーヴァン大学[ベルギー])

演題：私はなぜ『「知」の欺瞞』を書いたのか？

日時：2001年4月11日(水)、18時30分から20時30分頃まで

場所：日仏会館601会議室 (東京都渋谷区恵比寿 3-9-25)

問い合わせ先：hori@sfc.keio.ac.jp

ブリクモン氏には、アメリカの物理学者アラン・ソーカルと協力して『「知」の欺瞞』を書き、先ずパリで出版するにいたった動機を説明する形で、『「知」の欺瞞』と現代フランスの思想傾向との関係について語っていただきます。今日における「啓蒙」の状況や、認識論上の相対主義のことなどが話題に上るであろうと思われま

す。講演の時間が1時間余、あとは質疑応答・討論、という予定です。

講演と質疑応答・討論における使用言語は、GEFCOの性質上、基本的にはフランス語です。講演者には、なるべくゆっくり話すようお願いしました。ただ、一般参加歓迎の会ですので、ケース・バイ・ケース、適宜端折ったかたちで、司会をつとめる私が通訳することもあり得ます。

関心をお持ちの方は是非お出まし下さい。

HORI, Shigeki

hori@sfc.keio.ac.jp

●ブライディ・アンドリュース博士 (ハーバード大学) 来日

研究交流ミニ・ワークショップのお知らせ

テーマ： 「ハーバードでの東アジア科学史研究の動向に

ついて」

1月15日 (月曜日：注 この日は成人の日ではありません)

午後3時-5時 京都大学人文科学研究所 東方面会議室 (京都・北白川)

アンドリュース博士は若手の科学史・医学史家であり、特に近代解剖学や結核・細菌説の中国への同化に関する研究などで知られております。またケンブリッジ大学のカニンガム博士 (医学史) との共編によるマンチェスター大学刊行会からの著作は、非西欧世界からの視点で医学史を論じたものとして高い評価を受けております。(著作リスト参照。) 同女史は、ケンブリッジ大学の科学史・科学哲学科の出身であり、塚原とはジョセフ・ニーダム博士の下の僚友でした。現在はハーバード大学の科学史・科学哲学科でのアシスタント・プロフェッサーおよびヘッド・チューターを勤められており、国際東アジア科学・技術・医学史学会のセクレタリーでもあります。

今回のアンドリュース博士の来日は、「科学技術とジェンダー/フェミニズム」という神戸大学でとっている科研費 (ジェンダー研究) が主体になっての招請です。これは、ハーバードの科学史・科学哲学科で、「ジェンダーと科学技術」というコースを、同女史が担当されているため、そのシラバスやリーディング・リストなどを通じて、このコースの構成・ねらいなどを紹介していただく企画です。今回のミニ・ワークショップでは、そのお話もふくめて、ハーバードでの科学史研究・中国学研究の現状にも触れつつ、情報交換をしてゆく予定にしております。

よろしくお願いいたします。

塚原東吾 tel./fax. +81-86-254-1447 tel./fax.

+81-78-803-7435

BYZ06433@nifty.com

●公開シンポジウム

生命操作はどこまで許されるのか?— (人のいのちの始まり) と科学の介入—

主催：国際宗教研究所 後援：朝日新聞社・大正大学

この度、私ども国際宗教研究所では、下記のように公開シンポジウムを行う運びとなりました。現代の急速に進む科学技術の進歩が投げかける困難な問題に、宗教界がどのように応答すべきかを考える集いとしてと存じます。ふるってご参加下さいますよう、ご案内申し上げます。

(1) 日時・場所

日時：公開シンポジウム 3月17日 (土)、13:00—17:40 (開場・12:30)

場所：大正大学礼拝堂

〒170-8470 東京都豊島区西巢鴨3-20-1

(地下鉄都営三田線「西巢鴨」下車徒歩2分)

都電荒川線「新庚申塚」下車徒歩7分

J R埼京線「板橋」下車徒歩8分

(なお、シンポジウム終了後、希望者参加による懇親会を行います。18:00—20:00)

(2) パネリスト・司会者

◇発題者

井村裕夫氏 (生命倫理委員会委員長、元京都大学学長)

西川伸一氏 (京都大学教授、基礎医学)

藪田稔氏 (京都大学名誉教授、秩父神社宮司)

大村英昭氏 (関西学院大学教授、浄土真宗僧侶)

島藪進氏 (東京大学教授、宗教学)

◇コメンテーター

最相葉月氏 (ノンフィクションライター)

位田隆一氏 (京都大学法学部教授、国際法)

◇司会

村上陽一郎氏 (国際基督教大学教授、東京大学名誉教授、科学史)

(3) 主旨

[人間のクローンが可能に]

近年の生命科学の発展は著しいものがあり、これまでは考えられなかったような、新たな医療の可能性が切り開かれようとしています。臓器移植もこれまでのように、他者の臓器をもらうのではなく、もっと自分のからだにあった臓器を別に作って取りかえるというやり方が可能になるかもしれないといえます。たとえば動物のからだを借りて自分の遺伝子をもった細胞を育て、働かなくなった臓器を動物のからだから補充するというようなことも夢ではない事柄と考えられているようです。

このような新しい医療の可能性を切り開く上で画期的な出来事の一つは、いわゆる羊のクローン、ドリーの誕生でした。1996年、イギリスのロスリン研究所で、羊の雌雄の生殖細胞をかけあわせることなしに、一頭の雌の羊から、その羊と同じ遺伝子をもつ子どもを作ることができたのです。とても難しいであろうと思われていた、高等な哺乳類のクローンを作ることができることが判明し、その技術を用いれば、人間のクローンも作ろうと思えば自由に作ることができることは確実と、皆が思うようになりました。しかし、男女の生殖細胞の合体を経ずして、ある人間と同じ遺伝子をもった人間を産み出すことが許されるでしょうか。

[胚とES細胞 (万能細胞) の研究]

多くの国々の政府が、人間のクローンの作製の可能性に危惧を表明し、禁止の方向で政治的処置をとり、さらに法律の整備等を進めようとしています。しかし、クローンの禁止をしようと思うと、関連する新しいさまざまな医療技術や、研究の可否についても問わなくてはならなくなります。卵子と精子とが合体した受精卵は、一人の人間のいのちの始まり (生命の萌芽) といえる「胚」となります。やがて胎児となる前の、形も定まらぬ細胞の塊ですが、しかし、その細胞群は将来、まったき人間にまで発達することができる不思議な存在です。いのちの尊厳をそこに認めな

いわけにはいかないのではないのでしょうか。ところが、この「人の胚」を用いて、さまざまな医療技術を開発することができるのです。

たとえば、胚の段階までなら、クローンを作ってもよいのでしょうか。子宮に着床する前の「クローン胚」を作ることができれば、それを用いてさまざまな実験や医療技術の開発ができるでしょう。また、胚から取り出すことができる「万能細胞」、すなわち無限の増殖力を持ち、さまざまな人体組織に発展していくことができるES細胞 (人胚性幹細胞) にも大きな期待がかけられています。すでに1998年、アメリカの学者が人間のES細胞の樹立に成功しました。クローン作製にまさるとも劣らない重大な技術開発と見なされています。この細胞を取り出して、医薬に必要な物質を生み出したり、臓器を作り出すなどということも可能になるかもしれません。

[生命操作はどこまで許されるのか?]

しかし、胚を破壊してそのかわりに取り出すことができるこのES細胞、「いのちの不思議」を体現するようなES細胞を、科学の対象として研究することが許されるのでしょうか。許されるとしてどのような配慮が必要でしょうか。新しい生命科学と生命操作技術の発展は、「〈人のいのちの始まり〉への科学の介入」という、人類がこれまでまったく知らなかった、新しい問題を現代人につきつけているのです。

日本政府は科学技術会議の生命倫理委員会を中心に、クローン作製や人胚研究の許容可能性について審議を重ねた上で、2000年4月に「ヒトに関するクローン技術等の規制に関する法律案」を国会に提出しましたが、国会は同年11月にこの法案を成立させました。ES細胞の研究についてもいちおうGOサインが出たと理解されています。しかし、この問題についての国民の理解はまだまだ十分とはいえません。世界各地で今、さかんに議論が行われているところです。人のいのちの尊厳に関わる問題ですから、それにふさわしく、多くの国民の理解を得て、じっくり議論を深めていく必要があります。

[問われる宗教界の対応]

日本の国内でも、この問題に危惧を表明する人々は少なくありません。宗教界からも、すでにカトリック教会や大本教から、より慎重な検討を求める声が上がられています。キリスト教とは異なる宗教的基盤をもちながら、最前線の科学に深い関わりをもつ日本は、かつて脳死問題についてそうであったように、この問題についても、独自の文化的宗教的伝統を踏まえながら、確かな人間観や生命観に基づく方針を形づくっていくべき時です。このシンポジウムは、宗教界がこうした問題について真剣に考えていくための、一つのきっかけを作ろうとするものです。また、この問題をめぐる宗教界の声が広く聞かれ、理解されていくための機会ともしたいと考えています。自然科学の複雑な知識が求められる問題なので、まずは問題点を理解することに力点を置きます。そして宗教団体や宗教に関わりをもつ人々が、科学者やその他の人々と協力しながら、今後この問題をともに深く考え、豊かな内実をもった世論を形成

していくのに貢献するための手がかりを提供することを目標としています。

(4) 参加申し込み

国際宗教研究所賛助会員関係者・個人会員、および宗教情報リサーチセンター (RIRC) 会員は無料。一般の方は、1,000円、学生は、500円です。なお、懇親会費は、3,000円です。

参加ご希望の方は、ファックスか葉書で国際宗教研究所まで、お申し込み下さい。参加費は当日、受付で申し受けます。

連絡先：(財) 国際宗教研究所 (〒165-0035 東京都中野区白鷺2-48-13、Tel/Fax:03-5373-5855)

●公開フォーラム 「小児の脳死臓器移植はいかにあるべきか」日本小児科学会主催

日時：平成13年5月5日 (こどもの日) 13:00～17:00

場所：東京女子医科大学弥生記念講堂

プログラム

基調講演：

座長：中村 肇 (神戸大学病院長・小児科学)

演者：柳田 邦男 (ノンフィクション作家)

公開討論会：

座長：谷澤 隆邦 (兵庫医科大学小児科教授)

仁志田博司 (東京女子医科大学母子センター教授)

パネリスト：

* 森岡正博 (大阪府立大学倫理学教授)

：生命倫理的観点から

* 杉本健郎 (関西医科大学小児科学助教授・遺族)

：小児科学会アンケート調査結果

* 町野 朔 (上智大学法学部教授)

：町野案の解説

* 恒松由起子 (国立小児病院、医長)

：悪性疾患に罹患した児の意識

コメンテーター：

* 阪井裕一 (国立小児病院麻酔・集中治療科)

：小児移植医療アンケート調査

* 曾根威彦 (早稲田大学法学部教授)

：町野案に関する法学的意見

* 掛江直子 (早稲田大学人間科学部助手)

：子どもの権利を守る立場から

* 鈴木利廣 (弁護士)

* 田辺 功 (朝日新聞編集委員)

会場整理費：500円

参加資格：どなたでも参加できますが、発言は座長の指示に従って下さい。

●●文献情報●●

●和田秀樹『学力再建』PHP研究所

ちょうどいまMLでの話題に関連する図書の書評を見つけました。

和田秀樹『学力再建』PHP研究所、1300円

本そのものはまだ見ていませんが、毎日新聞の書評欄に紹介がありました (2001年2月11日)。

一部を引用しましょう。

「教育問題を深く考え続けている著者が、日本の教育に警告を発している。一生懸命に勉強することの価値が無にされているのが根本的な問題であるという。そして、教育をまっとうなものにするために、大胆にいう。エリート教育のどこが悪い。管理教育でなぜ悪い。賞と罰で生徒をコントロールすべきだ。

長い目でみて何が本当にわが子のためなのか。子どもは権威に飢えているのであり、親がビシビシと鍛えるべきだ」

最後の一文は、著者の言葉なのか評者の言葉なのかよくわかりませんが、中島さんの議論とも似たところがありますね。和田秀樹氏というのはどんな人なのでしょう。 (梶氏より)

●カロンのアクターネットワーク理論是相当に深いと思えるようになっていたのですが、その論集が出ているのにきがつきアマゾンで買いました。

John Law and John Hassard, Actor Network Theory and After, 1999, Blackwell, ISBN 0-631-21194-2 pbk

最後の方には、カロンがアクターネットワーク理論の市場におけるテストなんぞという論文も書いてます。どこかの研究会で取り上げてもらえたらうれしいんですが。(中島氏より)

●「双書科学／技術のゆくえ」という岩波のシリーズ二冊

佐藤 文隆『科学者の将来』(双書科学／技術のゆくえ) 岩波書店

村上 陽一郎『文化としての科学／技術』(双書科学／技術のゆくえ) 岩波書店

サイズ：B6判 / 175p

●『総特集 柳澤桂子—生命科学者からのおくりもの』河出夢ムック、文藝別冊

2001年1月30日、河出書房新社

という本を本屋で見つけました。発生学を専攻する実験生物学者であったものの、原因不明の病気に倒れて病床につき、長らく闘病しながら多くの生命科学に関するエッセイを書き続けていた柳澤桂子の特集号です。

1999年11月5日のNHKドキュメントにっぽん「いのち再び」で紹介されたように、氏は抗うつ剤による治療で奇跡的に全快したということです。

インタビュー、対談（夏樹静子、中村桂子）、エッセイ（中村桂子、安田暎胤、米沢富美子）、作品（小説「父のこと」、エッセイ「鳥と恐竜」、自選歌集「生あるもの」、エッセイ集）、評論（吉田基子、高橋敬基、佐倉統）、資料（自筆略年譜、作品案内）

などからなります。（梶氏より）

●高山義浩『アジアスケッチ——目撃される文明・宗教・民族』（白馬社、2001年5月、本体1500円＋税）

ウチの医学部のカリキュラムの特徴のひとつに「自己開発コース」というものがあります。ちょうど基礎医学（と内科・外科の総論）を学び終わった段階の4年生の4月～7月（実際は、最大限使おうとすると3月～8月の半年）学生さんを完全に「放し飼い」（笑）にします。

学生さんは学内や学外（国外を含む）の研究室で研究してもいいし、好きな場所で好きな社会活動をして構いません。一応、単位として認定するので、学外に出る場合は審査会がありますが、これは教官と学生たちの中から選ばれた委員と一緒に審査します。

で、著者の高山くんは現在ポリクリ中の6年生なので2年前の「自己開発コース」の結果が上記の書物です。

もともと旅のレポートとしてネット上で配信されていたものを精選したものがこの書物なのですが、下手な紹介をするよりも抜粋したものを読んでもらった方が早いので、著者の許可を得ました。（川崎氏より）

春をひさぐ少女たち

東南アジアを十数回も訪れていると、さまざまな友人ができる。バンコクの歓楽街で踊り子をしているトゥという少女もその1人だった。トゥやその仕事仲間たちとの出会いは、僕にとって、タイの底辺で生きぬく売春婦の生活が一筋縄ではいかないという難しさを教えてくれるものだった。

まず、彼女たちの労働環境はきわめて劣悪だった。タイでは、そもそも売春が非法なので、労働規準と呼べるようなものがない。窓のない不衛生な待合室で煙草を吸いながら客を待ち続けるか、さもなくば客がいる限り何時間でも、何人でも相手をし続けなければならない。客がつきにくい少女は、女性器から剃刀を取り出したり、蠟を垂らしたり、吹き矢で風船を割って見せたり、そんなキワ物の芸を毎日舞台上で演じ続ける。昨年の秋、そんな芸で生計を立てていたブンは舞台上で流産してしまった。膈の中に空気を吹き込んでラッパを吹く芸の最中だった。妊娠3ヶ月だったが、店のオーナーは休みを許してくれなかった。彼女たちに休みは原則としてない。生理になれば3日ほど

休ませてもらえるが、ピルの常用を強要され、生理を止められたまま何か月も休みなく働き続けている少女も少なくない。そして、どんなに働いても、東北タイ出身の色黒な彼女たちの月収はせいぜい3000バーツ（約1万円）にしかない。

タイ東北部の農村から、小学校を出ると同時に連れてこられた彼女たちにとって、この生活がすべてである。教育のない彼女たちに、それ以外の生きる選択肢をイメージすることは難しく、現実もそれを許そうとはしないのだ。

そんな彼女たちにとって、エイズという問題は些細なことである。そんな目に見えぬ問題よりも、もっと多くの苦しみがすでに直接のしかかっているからだ。彼女たちに、「あなたたちの健康のために、コンドームを使用しましょう」と、エイズ教育を試みるのは確かに滑稽なことかもしれない。「私たちが毎日どんな生活をしているのか、知ってて言ってるんでしょうね？ お客の健康のためって素直に言ったらどう？」こう切り返されて終わりである。

彼女たちへの定期的なHIV検査は奨励されるべきことである。ただし、彼女たちにとって、陰性証明書は「来月も仕事を続けていいですよ」という売春許可証でしかない。あるいは、経営者にとっての“優良”売春業者証明である。HIV検査には、現実を踏まえた上での健康教育と陽性だった場合のきちんとしたサポート体制が伴わなければならない。しかし、感染が明らかになると解雇されて行方不明になるのが現実であり、感染後の彼女たちを援助するような保健医療活動は行われていない。だから、現状のHIV検査は、売春婦たちの保健医療への信頼を損なわせるものとなっている。

●星野芳郎「技術と文明の歴史」岩波ジュニア新書349円700（2000年5月）・・・古代から現在までの技術の歴史を人権の視点から眺めた、読みやすい内容です。

宮田一雄「エイズ・デイズー危機と闘う人々」平凡社新書047円680（2000年5月）・・・ニューヨークで新聞記者をしていた著者の、1997-1999年の3年にわたる日系人向け新聞記事のまとめめいた内容で、アメリカでのエイズと闘う人たちの様子がよく伝わってきました。

松下和夫「環境政治学入門」平凡社新書042円680（2000年5月）・・・経済学部卒の著者が環境庁へ入った後、OECDやUNCED（地球サミット）で勤務した経験をもとに、日米の環境政策を比較しつつ、環境を政治や社会の切り口から語り、アジアにまで言及した本です。日本の戦後の環境問題なんかも官僚としてさらりとまとめています。（平井氏より）

●●ウェブサイト●●

● 昨年開かれた農水省の「遺伝子組み換え農作物を考えるコンセンサス会議」に関する暫定報告書をつくり、小生のホームページにもアップしました。先日の「テクノロジー・アセスメントにおける市民の参加を考えるシンポジウム」についてもSTS的に興味深かったところに触れています。

これは、基本的には、科研費でのGMO研究の一環で書いたものですが、具体的には明日からリスボンで開かれる Food, Agriculture and Biotechnology: Recent Controversies, STS RESEARCH AND THE POLICY PROCESSという国際ワークショップ用の資料として急遽用意したものです。

小生は同会議には出ませんが、神戸大の三浦さんと、中村君が参加し、資料も持って行ってくれます。また最近、STSNJに入会した東大法学部大学院生で松下政経塾の下斗米さんが、急遽オブザーバーとしていくことになりました。

先週末に慌てて書いたものなので、文法ミス続出でお恥ずかしい限りですがいろいろコメント頂ければ幸いです。
(平川氏より)

●●会員消息●●

●著作『文化としての生殖技術－不妊治療にたずさわる医師の語り』で女性問題に関する優れた研究に与えられる、第二十回山川菊栄賞を受賞。足かけ十年に及ぶ研究の成果だそうです。

不妊治療についてどのようにコメントしていいのかわかりませんが、柘植あづみさん、受賞おめでとうございます。
(前島氏より)

STSNJメーリングリスト のお知らせ

STSNJ Network Japanでは、会員のみ参加いただけるSTSNJメーリングリストをご用意しています。

情報交換や議論に、幅広くご利用ください。

登録を希望されるかたは、事前に登録してあるアドレスで、事務局 <office@stsnj.org>までメールをお送りください。会員の方であるか確認ののち、手動で登録いたします（しばらくお時間をいただくこともあります）。

また、登録メールアドレスの変更は事務局 <office@stsnj.org> までお願いいたします。

●編集委員からのお願い●

会員の皆様には、各種情報をお寄せくださるようお願いいたします。特に、会員の皆様の関わられた出版物、報告書の情報をお知らせください。また、会員消息の項目も充実させたいと思っておりますので、お知らせください。今回も多数の方々から情報を提供していただきました。ご協力どうも有り難うございました。

なお、情報は、事務局 <office@stsnj.org>宛あるいは
skasuga@mars.dti.ne.jp

までお送りくださいますようお願い申し上げます。

<編集委員・春日 匠>

STS Network Japan Yearbook・論文投稿規定

STS Network Japanでは、Yearbook'2001（2001年度刊行予定）に収録する投稿論文を募集いたします。前回同様、必ずしもアカデミックな基準にこだわらず、読んで面白いオリジナリティーにあふれた論文を求めます。一定の水準を保ったものであることは前提条件ですが、萌芽的な研究のアイデアを大胆にまとめたもの、教育の実践報告なども受け付けます。この趣旨にしたがって、総説論文や、レビュー論文などは掲載いたしません。

なお、Yearbook 2001の投稿締切は、2001年8月31日です。ふるってご投稿をお願いします。

STS Yearbook論文編集委員会(2000年1月15日現在)

編集顧問	村上陽一郎（国際基督教大学教授）
委員長	小林信一（電気通信大学助教授）
副委員長	中島秀人（東京工業大学助教授）
委員	小川正賢（茨城大学助教授）
	柴田 清（新日本製鉄先端技術研究所）
	調麻佐志（信州大学助教授）

A.投稿の資格

a-1 少なくとも1名、STS Network Japanの会員（会費を払っている人）を著者として含むこと。また、非会員の共著者を含む場合、その共著者すべてが、STS Network Japanの精神を尊重すること。

a-2 投稿は無料です。

B.原稿の審査

b-1 投稿論文の審査は、論文編集委員会が責任をもって行ないます。委員、もしくは委員会が適当と認める査読者によって原稿を検討し、掲載の可否を決定します。

b-2 論文編集委員会は、必要に応じて著者に論文の修正を求めることがあります。

b-3 論文編集委員は、STS Network Japanの総会の議決によって選出します。

b-4 原稿は必ずワードプロセッサを使用して作成し、下記のあて先にお送り下さい。提出していただくのは、原稿のA4サイズのプリントアウト、図版等、各5部です。原稿の控えのフロッピーは、必ず著者の手元に残して下さい。

b-5 掲載が決定されましたら、原稿を収めたフロッピーディスクと最終的なプリントアウトを一部お送りいただきます。編集の都合上、Mac OS, Windows 95または98,MS-DOSのいずれかのテキストファイル（特殊な記号を使用せずどのワープロソフトでも読めるいわゆるASCIIファイル）をご準備ください。図版は、写真製版できる形にして別にお送りください。

C.執筆要項

c-1 原稿は横書きとし、原則として使用言語は日本語とします。それ以外の場合には、事前にご相談ください。

c-2 原稿の分量は、原則として400字詰め原稿用紙40枚相当の長さを最大とします。この長さには、注、図版等を含みます。なお、図版はA4サイズ1枚（刷り上がりサイズ）につき原稿用紙3枚に換算してください。

c-3 原稿の冒頭には、表題、著作者名、著作者の所属とこれらの英訳、およびキーワード（5語以内で日本語を原則とする）を記してください。なお、キーワードは検索の便宜を図るためのものです。

c-4 原稿末尾には英文要約（300語以内）を付けることをお勧めします。これは、原稿の枚数には含めません。

c-5 単行本、雑誌の題名は、和漢語の場合は『』に入れ、欧文書籍の場合にはイタリック体としてください。論文の題名は、和漢語の場合には「」、欧語の場合には ” の中に入れてください。

c-6 注は本文の中に挿入箇所を算用数字で示し、原稿の最後にまとめて記してください。

c-7 注で引用する文献は、書籍の場合原則として次のような順序で記載してください。著者名、（編・訳者

名)、表題、(欧文書籍の場合は出版地)、出版社名、出版年、引用ページ数(〇-〇ページ、欧文においてはpp.〇-〇)。

例:柴田鉄治『科学報道』、朝日新聞社、1994年、18ページ。

I.ウォーラステイン、川北稔訳『近代世界システム』、名古屋大学出版会、1993年、161-187ページ。

David Aubrey, Oliver Lawson-Dick (ed.), *Brief Lives*, London, Mandarin Books, 1992, pp. 27-31.

c-8 論文からの引用の場合は、著者名、表題、雑誌(書籍)名、巻、刊行年、引用ページの順に記載してください。

例:山田太郎「若者の自然科学に対する意識」、『日本物理学会誌』、67(1998)、23-24ページ。

John Mulkay, 'Hope and Fear for Science', *Social Studies of Science*, 28(1999), pp. 1-8.

c-9同一の文献を再度引用する場合には、下記を参考に表記して下さい。同一著者の同一年の複数の文献を引用している場合には、a,bなどで区別して下さい。なお、どれがa,bなどに該当するかは、最初の引用の際に決めて下さい。

例:山田太郎(1998年)、18ページ

Aubrey (1992), p. 15.

Mulkay (1999a), pp. 211-212.

c-10 適当な漢字表記のない外国の地名や外国人名はカタカナで記し、()の中に原綴をおさめてください。なお、これはあくまでも原則ですので、不明の場合にはお問い合わせ下さい。

c-11 最終的な原稿(掲載決定後)では、イタリック体の指定は下線を、ボールド体の指定は下波線を、赤色のボールペン等で記入してください。

c-12 年号の表記は原則として西暦としますが、西暦以外の年号を使用する場合には、1976(昭和51)年のように、西暦に続けてカッコ内に示してください。

c-13 図版はそのまま写真製版できるものを用意し、挿入箇所がはっきりと分かるように示してください。なお、著作権上図版の使用許諾が必要な場合には、原稿の執筆者が原典の著者からあらかじめ許諾を得てください。

D.著作権の帰属

d-1 掲載原稿の著作権は、STS Network Japanに帰属します。ただし、著作者の人格権に所属する部分は、著作者に留保されます。

d-2 Yearbookの掲載原稿の別刷は作成しませんが、著者に限り、著者の関与した部分の複製を20部まで自由に作成することができます(共著者がいる場合には、著者数×15部までで最大50部を超えないこと)。

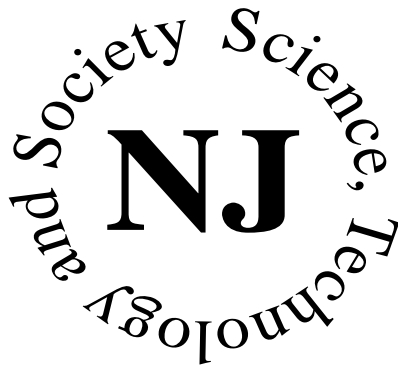
E.原稿の送り先・問い合わせ先等

e-1 〒177-0054 練馬区立野町10-33-804 中島秀人

(投稿原稿であることが分かるように、封筒に明記してください)。

tel 03-3594-5504 /e-mail nakajima@mail.me.titech.ac.jp

e-2 Yearbook 2001論文投稿締切 2001年8月31日 消印有効。



編集後記

ニューズレターの第一号をお届けします。
夏の学校のご案内のために、あわただしい発行となりました。
誤字、脱字がありましたらもうしわけありません。

また、参加できなかった方などには申し訳ございませんが、春のシンポジウムの報告は事情により次号に掲載させていただきます

夏の学校でお会いできることを楽しみにしております。
今年度もよろしくお願ひします。 K.S.

Newsletter Vol.12, No.1 (通巻No.42)
2001年05月15日発行

編集
STS NETWORK JAPAN 事務局
Newsletter編集委員会
代表 夏目 賢一／委員 春日 匠

発行
STS NETWORK JAPAN
代表 夏目 賢一

STS NETWORK JAPAN 事務局
〒153-8902 東京都目黒区駒場3-8-1
東京大学大学院総合文化研究科
広域システム科学系
藤垣裕子研究室気付
FAX:03-5454-6990
E-mail: office@stsnj.org
WebSite: <http://stsnj.org/>

郵便振替口座 00170-1-63708
加入者名 STS NETWORK JAPAN
(年会費 3,500円)